

関連研究分野との連携とその有効性

人文科学研究科長 森 茂 暁

先般、私は京都のミネルヴァ書房という出版社から、日本歴史上の重要人物の評伝シリーズである「日本評伝選」の一冊として、『満濟 - 天下の義者、公方ことに御周章 - 』という著書を刊行した。満濟（1378～1435）は、室町時代の初期に出た京都の醍醐寺三宝院（真言宗）の高僧で、室町幕府政治の運営に深く関与した「黒衣の宰相」と称すべき人物であった。しかし、この人物の知名度は極端に低く、一般にはほとんどと言ってよいほど知られていない。

満濟の事績については、紙幅の関係で詳しい説明を施すことはできないが、ここではあるひとつの歴史的事実に注目したい。それはクジびき將軍として著名な足利義教にまつわることである。「室町殿」足利義持は応永35年（1428）1月17日夜に危篤状態に陥った。義持は生前に自分の後継者を決めていなかったため、幕閣たちは満濟にリードされて、4人の義持の弟たち（いずれも出家者）のなかから1人を選ぶことで合意し、源氏の守護神として著名な石清水八幡宮（現京都府八幡市）の神前でクジびきをすることになった。神意による選出である。結果的に、天台宗の青蓮院門跡のポストにあった義円（のちに義教と改名）が当たるのであるが、問題は史料に書き記されたその方法である。

この神前でのクジとりについて記す史料には2種が知られている。1つは、時の権大納言万里小路時房の日記『建内記』である。そこでは4人の名前を書いた4本のクジを3度ひき、結

果はいずれも義円と出たとある。結果があまりにも不自然であること、そして一連のクジとりにも主導的な役割を果たしたのは満濟であることから、このクジとりは満濟がしくんだイカサマだと解するむきもあった。しかし、それはちがう。

ある時、4本のクジを3度引いて3度とも同じ目が出るということについて、私は同僚の数理社会学を専攻する某教授に何気なく尋ねた。教授の返事は、そのようなことは作為がない限りほぼあり得ないという結論であり、それを証明する数式を書いたメモを頂いた。そこで私はハッと思った。先の『建内記』の記事自体が誤りではないかということ。

クジとりのことを記す史料には、いまひとつ満濟自身の自筆日記『満濟准后日記』がある。この日記では、幕府の管領畠山満家が石清水八幡宮の神前で4本のクジのうち1つをひき、それを幕府に持ち帰って開くと義円の目が出たという、ごく普通のクジびきの光景が記されている。史料の性格の上からも、満濟の日記の記事の方が信憑性は高からう。

ようするに、『建内記』の記事の不自然さは数理社会学の常識的な知識によって裏付けられたわけである。まったく別の研究分野からの応援を導入することが問題の解決に大きな力となるということを思い知った次第である。ちなみに、泉下の満濟もイカサマの汚名をそそぐことができずや安堵していることであろう。